



会報の発行が遅れたことをお詫びします。数度の役員会で重要案件を討議し、結論が出るまでに日数がかかったことが大きな理由です。本号に詳細を載せましたので、よくご覧いただきたいと思います。

本号の内容

巻頭言 : 宮崎稔会長 「ムダの意味を見出そう」

- 1 役員会での討議から
 - (1) 「地域子ども教室推進事業」を行います。各地で取り組んでください。応募をお待ちしています。
 - (2) ホームページが新しくなります
 - (3) 高知フォーラムの準備が進んでいます
 - (4) 2006年度の第10回フォーラムは、東京でおこないます
 - (5) 資料集の今後について (CD化について)
 - (6) 予算の執行について
- 2 高知フォーラムの概要
- 3 北関東支部結成フォーラム

巻頭言

「ムダに意味を見出すそう」 会長 宮崎 稔

時代に逆行するような内容もあるので物議を醸し出してしまうかもしれませんが・・・。

リストラで生き延びている企業

バブル以降、深刻だった日本の経済が上向きに転じているという話を聞きます。しかし、ある企業の関係者に聞くと、「リストラ等のこれ以上ないというようなそぎ落としの努力によって、数字上の景気を確保しているだけであって、本当は企業の体力は格段に落ちているんですよ。」とのことでした。その人は「確かに以前はムダもあった。しかし、それは余力にもなっていた。今のように技術者をどんどんリストラして契約社員にしていたら、不合格品が多くなるというだけではなくその企業だけの持つ技術は継承されない。だから、むしろこれからの方が企業にとっては心配なんですよ。」と続けられました。私は企業のことは全く分からないのですが、すごく実感できる話でした。

コミュニティのヘンなおじさん

秋津のコミュニティルームや校庭で子どもたちと活動している大人の様子を見てみると、子どもたちはダメ親父そのもののようなヘンな人の周りによく集まっていました(失礼!)。大人でも、あまりきちんとし過ぎる人は煙たいのでしょうか、必要な人であるにも関わらずちょっと敬遠さ

れがちな人がいました。そんな話ですね。逆にホッ！とするような部分があるヘンなおじさんは、人と人の潤滑油になっているのかもしれませんが。

だらしなかつたりヘンだつたりするのはほとんど男性です。でもその人のおかげで、子どもも大人もコミュニティに集まり、活動もおおらかに進んでいるということは疑う余地がありません。一般的に男は器が大きいだけに穴も多く、でもそのダメな部分が実はコミュニティの余力であり、当面の活動を進行させていくこと以上に貴重な力となっているのではないかと思います。

学校で感じるのは、親父のいない子ばかり

ときどき、子どもの問題で保護者に学校へ来ていただきます。私は、「両親で！」とお願いするようにしていることが多いので、緊急なことを除いては保護者のご都合のよい日に来ていただきます。でも、二人で来ていても、まるで一人の母親と話しているのと同様なことがよくあります。ほとんどと言ってもよいでしょう。「子どものことは妻にまかせていますので。」「妻の言うとおりです。」と応えるのが父親の役割とでも思っているのでしょうか、また、家庭内の意見が一致しているということを見せないとまずいとも思っているのでしょうか。親父らしい視点からの考えが出てこないのです。

20年ぐらい前までは、父親と母親が違った意見を言い、それがまた「なるほど！」と感心させられる意見であつたりすることが多かったのです。母親とは違っていても親父は親父の考えで子どもの問題にはっきりと意見を言いました。目の前の問題の先にあることを洞察して意見を言ってくれたりもしました。

今、男も目の前のことにしか目が行かなくなってしまったのかということ、そうではないと思います。酒を飲んでだらしなくしている面も多く、普段の行動に問題のある男は（男はほとんどそうなのですが）、正論をいう妻の前で小さくなっているのではないのでしょうか。

正論だけが唯一絶対の価値になると・・・

人間ほど、一人前になるまでに長期間にわたって「女権社会」で育てられる動物はいないという話を聞いたことがあります。両性はその役割に応じて育てなかつたら人格形成に問題が生じます。岸副会長がよく言う「製造物責任者」として、男の役割は重大です。これは、男性も家事をする等で両性の役割を果たすということもありますが、ダメなところもあるけど、そのダメな部分こそ価値があり、子どもの育成や社会の潤滑油として重要なのだと言うことが見直され、男の価値が復権されていくことでもあるように思うのですがいかがでしょうか。

正論ばかりがまかり通るのではなく、ムダと思えることやダメなもの・ヘンなことで平気で出せるようになり、そこにも価値を見出せるおおらかさが余力になって、仕事先でも、家庭でも、コミュニティでも、子育てでも、元気な社会を創り出せたらなあと思っています。そうなれば、男たちはもっとコミュニティ活動をするようになるのではないのでしょうか。

一般論として昔から言われている「男とは」と「女とは」という性による違いを、そのまま使用しました。反論はあると思いますが・・・。

1 役員会での討議から

融合研として課題になっている下記の議題について、次のような手順で役員会を開き、結論を出しました。

- 10月30日 事務局長案を全役員にメールで提案
- 11月30日 事務局案をメールでやりとりしながら、役員間で検討
- 12月11日 役員会で決定
- 12月29日 役員会の開催

前回の積み残し分の討議

文部科学省より「地域子ども教室推進事業」の説明を受ける。

その後、「地域子ども教室推進事業」についてメールでやりとりしながら
役員間で検討

1月18日 「地域子ども教室推進事業」を融合研として受託することを決定

今回の手法は、会則が改正になってから初めてのやりかたでした。一同に会して何回も検討するのは時間的に無理ですから、メールでやりとりをしながら進め、会議は少ない回数で決定することができました。

(1) **地域子ども教室推進事業**を行います

なぜ、融合研として引き受けることにしたか

文部科学省では、平成16年度からの3年計画で、地域の教育力UPによって、子どもたちの居場所づくりを地域
住民主体で実施することにしました。そして、永続的に地域に根付かせることは急務であるということの必要性を強く感じて、「地域子ども教室推進事業」を立ち上げ、都道府県と民間事業団体とに事業委託をしました。ところが、形式的な「事業こなし」のような実態もあるようです。一方、「この事業はまだ2年間の継続を予定しているの、まちづくりを志向した手法になるように広めたい。」との思いも強く感じているようです。そこで、融合研がまだ全国的に十分な組織を持っていないにもかかわらず、文部科学省から「融合研こそ実施するにふさわしい団体である。仲間に加わっていただけませんか。」との打診がありました。

そこで、役員会で十分な検討をすると共に、不明な点は文部科学省に出向いて回答を得るなどしてきました。その結果、

1. 融合研は実践を通じた理論作りの研究団体であること。
2. 社会教育活動であれ何であれ、住民の主体性に基づく「まちづくりを志向する活動」は、融合研の目的の大きな柱であること。
3. 融合研は、実践の中で学びながら、地域のネットワークを作り継続的に動かせる形を創ることが重要であること。そして、実践の中からは新たなものは出来てこないという意味で、今回のプロジェクトは融合研にとっても大きなチャンスとなり得ること
4. 融合研の外にいる人たちとのネットワークづくりも、今回の事業を通じて可能となり、融合研のレベルをもう一段階引き上げるためには、今回のチャレンジは避けて通るべきではないことと最終的に判断し、自治体とは別に一民間団体として、「この事業を独自に引き受ける」という結論に達しました。

一方、役員会で一番危惧されていたことは、実行に当たった「体制」の問題でした。しかし、下記のように、実務は東北支部が担い、東京方面が文部科学省等との折衝などを行うということになりました。

「地域子ども教室推進事業」融合研実行委員会（仮称） ; 融合研のプロジェクトとして位置づける

〔組織〕 名称は、全て仮のもの

委員長 ; 庄子平弥

副委員長 ; 種田祝次

政策委員長 ; 越田幸洋

事務局長 ; 野澤令照

事務局員（庶務担当） ; 針生英一・藤尾智子・斉藤浩一・野澤桂子・菊池剛史

(渉外担当) ; 矢吹正徳・江口勝善・上農良廣・堀越幾男

このほかに、実質的には依頼する方が出てきますが、中心になる人だけをまず決めました。

文部科学省との質疑から、

Q 1 融合研が、地方自治体の運営協議会に入らずに「独自に」委託を受けたいが、可能か？

A 可能である。

Q 2 法人格のない融合研であるが、問題ないのか？

A 問題ない。

Q 3 計画書の提出は、いつまで？

A 3月末までである。

2月中旬頃に、17年度版の正式な書式ができるそうです。

Q 4 提出した計画の審査によって、取り消されることはあるのか？

A 常識の範囲内の計画であれば、認める。

Q 5 必要経費の流れは、どうなるか？

A 事業が認められたら、「融合研の運営協議会」に一括振り込む(6月中を予定)。

その後、「各地域の実行委員会」に振り込んでいただく。各地域の実行委員会は、この資金専用の通帳をつくってください。

6月までの資金は立て替え払いになります。当面の費用として必要な地域は、融合研事務局へご相談ください。

Q 6 都道府県以外の民間団体(融合研を含む)で受託している一覧表を配布し、都道府県や各地の実行委員会に周知して欲しい。そうすることによって、自治体の実行委員会とのトラブルを避けることができる、

A 大事なことだと思うので、実行したい。

Q 7 各地域の実行委員会から提出された計画書や終了後の実績報告書の内容審査は、ひとつひとつ文部科学省がおこなうのか？

A 原則的にはそうであるが、融合研の運営協議会でパスしたものは尊重する。

Q 8 その他に何かあるか？

A 民間団体として委託を行うのであるから、できれば20箇所くらいは実施して欲しい。(後記)

A 備品の購入はできない。レンタルなら可。

A 融合研は民間団体であるので、場所の使用や事業の遂行面で、場合によっては自治体と「うまくやれないでトラブルになること」も考えられるが、その場合はうまくやって欲しい。「文部科学省から委託されているので」ということを、交渉段階から名を使って進めてくださって結構だ。

このような形で融合研としてこの事業を引き受けます。子どもの居場所をつくるとともに、大人の居場所やまちづくりにつながるような実際の活動は、各地の会員が行うこととなります。「やってみたい」「どのようなことができるのか」「もっと、詳しく知りたい」等については、

文部科学省の下記ホームページをご覧ください、

<http://www.ibasyo.com>

実行委員長の「庄子平弥さん」 heiya@cocoa.ocn.ne.jp

または、事務局長の「野澤令照さん」 nozawana@sweet.ocn.ne.jp

に、直接ご連絡ください。

応募のお願い(事務局から)

地域子ども教室融合研運営協議会・事務局長の野澤でございます。

事業の概要など詳しい内容は、下記に示しましたが、まずは「やりたい」「やってみたい」という方を募集したいと考えています。さらに、「どうしようかな」と迷っている方も、ぜひ声をあげて

いただきたく思います。

融合研総体としても、全面的に相談体制、バックアップ体制をとって行きたいと考えておりますので、今直ぐ手を挙げてください。不明な点や疑問な点などございましたら、遠慮なくお問い合わせください。

実施の時期は、必ずしも4月からとは決して申しません。準備の期間が必要ですから、例えば7月から始まるでも結構です。取り敢えず、文科省には、2月中にこれ位の実施予定があるという報告を必要としますので、急ぎご連絡をお願いします。

連絡のあった方には、ご提出をお願いする書式類を折り返しお送りいたします。

連絡先は、事務局長宛でお願いします。(野澤: nozawana@sweet.ocn.ne.jp)

今後の事務処理の効率化のため、印鑑を必要とするもの以外は、メールでのやりとりとさせていただきます。メールをやらない人は、

メールをやっている人をお願いする、か

事務局へご相談ください。TEL 090-4637-7591(携帯)

022-378-1293(野澤)

事業の目的活動内容等について

この事業のねらい

子ども達は、自然や人との関わり合いの中から「生きる力(社会力)」を獲得していきます。しかし、急速に進む少子高齢化、核家族化の中で子どもの育つ環境の悪化が危惧されています。わたしたち大人は、海や山で思いきり遊んで育ちその中から生きる力を身につけることが出来ました。未来の国の宝である子ども達に、私達が今出来ることは何なのか。考えて見なければなりません。家庭・学校・地域が一つになって、未来の日本を背負って立つ子ども達の心豊かな育ちを応援したい。こんな一人ひとりの願いを行動に示すための活動です。

活動内容

「社会全体で地域の子子ども達を見守り育てていく」という趣旨を踏まえて、地域の皆さんの協力により子どもの居場所(地域子ども教室)をつくり、子ども達が異なる年齢の友達や大人たちと交流したり、各地の特色を活かした、例えば、大人と子ども達が一緒になって、昔ながらの遊びをしたり、スポーツに取り組んだりパソコンの達人に操作の指導を受けたり、時には静かに読書したり、様々な生活体験をするなどが考えられます。

活動の場所・時間

場所：放課後や週末に学校・公民館・コミュニティセンター・町内会館・シャッターを降ろした空き店舗・空き家となっている民家等を活用して、小中学生を対象に、地域の大人たちが、スポーツや文化活動などの様々な体験活動の安全管理・指導のために地域の大人がボランティアで参加します。

この事業は、平成18年度までの計画で、子ども達が安全に安心して活動できる“子どもの居場所”(活動拠点)を設けるものです。

平成18年度に委託事業としての資金の交付が無くなっても、その後も引き続いてこの事業が持続できるように工夫していただくことが最も望ましいと考えています。例えば、学校近くの「一銭店」「駄菓子屋さん」のような場所があり、大人が安全確認・指導のために常駐し、子どもの遊び場の延長的な運営も考えられます

時間：放課後中心(土曜日、日曜、祝日、長期休業日も可) 最高に望ましいのは、毎日学校帰りの子ども達が気軽に毎日立ち寄れる文字通り「子どもの居場所」ができればこんなに良いことはありません。

経費の支援対象

実行委員会の諸経費、活動材料費、指導者への謝礼等が対象となります。備品の購入は認めら

れませんが、例えば場所の賃借料、必要な器具類のレンタル料、コーディネーターへの謝礼等の外、事業PRのためのパンフレット作成費等が含まれます。

はじめるには

平成16年度から各市町村教育委員会が取り組みを開始している自治体もありますが、これとは別に、融合研会員の方、又は融合研の会員の身近で活動している方が、一定の地域で実行委員会を設立(実行委員長(責任者)・活動指導員2名程度・安全管理指導員2名程度)し、融合研運営協議会に実施計画書、予算計画書等を添えて申請する必要があります。

これまでに全くこの事業に参加していない政令市が3市あります。このような都市部では、是非取り組んでいただきたいと思います。

計画の実行手順

運営協議会では、各実行委員会の申請について審査し、事業の委託を決定します。

これに要する経費は、予算計画書に基づき、各実行委員会のこの事業専用の口座に融合研運営協議会から振り込みます。決算報告書は、それぞれの支出証拠書を添えて実行委員長の印鑑を押して運営協議会へ提出していただきます。

以上が計画の概要ですが、この事業は、心豊かな地域交流の中で、子どもたちにたくさんの経験をさせるためには、大人たちの協力が必要不可欠のものです。地元教育委員会と「競り合ったり」する性格のものでは全くない事業でありますから、行政とは互いに連携を保ちつつ、子ども達の未来のために、地域は今何をなすべきかを最優先として融合研会員の皆様の真摯な取り組みを心からお願いいたします。

(2) ホームページが新しくなります

融合研では昨年度から、ホームページをもっと会員の皆様が利用しやすいようにということと、非会員にも広く広報できる媒体としての利用のあり方を再三の会議で検討してきました。その結果、以下のように「HPを新しくすること」に決まりましたのでお知らせします。

1 役員会開催日;12月11日(土)と12月29日(水)

方針(何を目的とするか)

・融合研の広報媒体とし、会員および非会員への情報提供の場とする。特に、非会員への宣伝媒体として機能させる。

・融合研の広報媒体とし、会員および非会員への共通の情報提供の場とする

・会員専用サイトは作らない

会員専用の情報については、MLでのやりとりで充分であると考えます。

内容(何を掲載するか)

現在のサイトを踏襲するもの

・融合研の説明(「学社融合とは」ということを分かりやすく説明したものを1ページくらい)

・会報

・他に、入会手続き、フォーラムのこと、書籍、リンク、サイトマップ、問い合わせ新たに組み入れるもの

・融合研の目指すもの

・会則

・雑誌「初等理科教育」誌上に掲載された会員の原稿

・「日本教育新聞」に掲載中の『学社融合の今』

- ・支部だより、会員自己紹介コーナー（会員同士の交流を深めることを目的とし、簡単なフォームを決めて、負担を少なくする）。
- ・会員実践報告（ただし、簡単なフォームを決めて、A4一枚程度のダイジェスト版にし、詳しく知りたい場合は、直接実践記入者に連絡する）
現在のサイトから削除するもの
- ・「ゆうごうつれずれ」を廃止
- ・「掲示板」を廃止し、メーリングリストでの情報交換を活用する。

管理者（誰に管理してもらうか）

- ・編集委員は、一堂に会して常時活動をしている「プログラム研究開発委員会（越田幸洋委員長）」が兼務する。
- ・管理者は、プログラム研究開発委員でもある「佐竹正実会員」をチーフとし、今後補佐役を決めて行う。

これまで斉藤・中村両会員には、大変な仕事を引き受けていただきHPが大きく役に立ち、また事務量も大幅に軽減されました。これまでのご努力に感謝します。

編集委員（誰に、どこまでを編集してもらうか）

- ・サイトの担当者を決め、その人がそれぞれのコーナーを受け持つ。
原則的に、執筆者が内容については責任を持ち、編集者は、内容には関わらない。したがって、盛岡フォーラムでの分科会担当者のように原稿の募集等をする。

新しいHP作成は、会員からも広く情報や考えを募集して構成する予定です。皆様の情報提供への積極的な協力をお願いします。

- ・管理者は、上記の に基づいておこない、一般公募はしない。
- ・編集者は、公募する。また、できるだけ全国に広がりがあるように、個人的にも声を掛ける。

越田編集委員長からのお願いです

鹿沼の学社融合研究所の越田です。

このたび融合研ホームページ編集委員長をお引き受けすることになりました。佐竹さん等の管理者とも力を合わせ会員諸氏からの情報提供をもとに、会員にも非会員にも役立つHPとするよう努力してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。新たなHPを3月末から運用したいと考えていますが、そのためには、会員諸氏からの情報の提供が必要です。

最後までお読みくださり、必要な情報の提供にご協力下さい。

学校と地域の研究会HPの新たな構成と編集

基本方針

融合研の広報媒体とし、会員及び非会員への情報提供の場とする。特に非会員への宣伝媒体として機能させる。

管理及び編集組織及び編集計画

HP編集委員会 毎月20日までに 情報提供 会員

事務局長・事務局（HP管理者）

毎月25日更新

内容構成

表紙・サイトマップ

融合研とは 融合研の目的と活動、あゆみ / 融合研の会則 / 入会方法

融合研の活動

本部の活動 役員会 / 事務局会議 / プログラム研究開発委員会

支部活動 千葉県支部 / 東北支部 / 北関東支部

融合塾

フォーラム・ミニフォーラム

学社融合とは

私はこう考える

実践報告等 会員研究実践報告 / 年報掲載論文 / 年報掲載実践事例 / 支部研修実践事例 / さっぽろだより / 融合レポート / 融合研MLからの転載

書籍・参考文献 書籍 / 雑誌等掲載論文等 (初等理科教育・日本教育新聞・会員からの情報提供)

リンク (会員が関係するホームページとのリンク)

問合せ

以下、情報提供のお願いです。

「学社融合とは」のページ中の「私はこう考える」原稿募集

融合研では、「学社融合」について定義していませんし、今後も会として定義する考えはありません。しかし、「学社融合」とは何かを知りたい会員や非会員も多数いることと思います。そこで、会員個々が考える学社融合の定義を紹介するコーナーを設けることにしました。それが「わたしはこう考える」です。皆様が考える「学社融合」についてぜひご意見を発信してください。

<募集内容>自分なりに考える「学社融合」の定義、イメージ 800字以内

冒頭に、タイトル、会員、氏名(居住地県・市町村名まで)を記す

末尾に、問合せ先(電話、FAX、メール等)を記入。希望者のみ。

* 個人情報の公開は危険性が伴うことを了承の上記入してください。

「学社融合とは」のページ中の「実践報告等」の原稿募集

会員が取り組んでいる実践をレポートしてお送りください。

<募集内容>自分なりに考える「学社融合」の定義、イメージ

A4版横書き40字×40行×6ページ以内(写真使用可)

冒頭に、タイトル、会員、氏名(居住地県・市町村名まで)を記す

末尾に、問合せ先(電話、FAX、メール等)を記入。希望者のみ。

* 個人情報の公開は危険性が伴うことを了承の上記入してください。

「書籍・参考文献」のページに掲載する情報募集

会員諸氏が執筆等をしている書籍・参考文献の情報を募集します。

原文提供の場合 発行者と転載の著作権処理をご自分で行ってください。できれば電子情報で提供ください。

情報提供の場合 論文等名 執筆者(会員、居住地県・市町村名)、

掲載誌等名、発行年月日、発行所、価格、頒布方法

* 1996年以降に発表・発刊されたものに限りませう。

* 1996年は「学社融合」という言葉を正式に使用した実践が始まった年です。

リンク先を募集します。

会員が関係するホームページと融合研HPをリンクさせたいと思います。

ただし、学社融合の考え方や実践のために参考になるHPに限定します。

* 「学社融合」については幅広い解釈です。また学社融合をすすめる上で必要な情報を掲載したHPも関係HPです。

提供下さる会員は、そのHPの代表者や管理者の了承をとったうえでHP発信団体等名、URLをお知らせください。リンクは、相互リンクを基本とします。以上の情報について、越田幸洋 mailyuki@bc9.ne.jp 宛に提供ください。

4月以降は、毎月20日までに情報を提供ください。FAX、郵送の場合は下記にお願いします。

(3) **高知フォーラムの準備が進んでいます**

高知フォーラムの準備が着々と進行しています。新規に入会する会員も急激に増えて、地元の熱気は高まっています。今回の特徴は、

「土佐の教育改革」を推進している高知県教育委員会と、会場地の夜須町との共催で実施
会場は、雄大な太平洋の景色がどの部屋からも展望できる海辺のホテルで行うこと
分科会のコーディネーター役やパネラーをはじめ、これまで実績を積み上げてきた融合研役員
や会員が実質的にバックアップすること

等々、楽しみでもあり、また密度の濃い内容を目指します。

2学期の始まりが早い北日本では、夏休み直前の開催になりますが、今から予定に入れておいて下さい。(詳細は、「2 高知フォーラムの概略」を参照。 受付開始は、次号で連絡します)

(4) **2006年度の第10回フォーラムは、東京でおこないます**

東京大会について

日時；2006年8月19日(土)～20日(日)

場所；「日本青年館」(予定)

神宮公園に近いので、夏は各種の大会が開催されて優先的に使用されるが、例年では、この時期は大丈夫そうである。2006年度の大会日程が2005年夏にならないと確定しないので、仮予約だけしておく。万が一この時期にダブったら、東京都ならそれからでも使える施設(多少高くついても)を探せるので、今は、ここの線で準備することにする。

夏休みの短い地方(北海道・東北)でもまだ夏休み中ですので、学校現場の教員の参加にも支障は少ないと考えます。

内容；10回大会に相応しいものを考える。

融合研10年の歴史の中で蓄積されてきた財産を元に、その実績を広く世に示すための書籍を出版するという案もあります。

主催；融合研本部

その他；広報活動をこれまで以上におこなって、多くの参加者を集めたい。

(5) **予算の執行について**

支部等の研修への補助金のありかた

- ・現在「上限10万円で必要経費を補助する」となっているが、自前ですべてまかなっている。(会員が講師になっている例が多く、無料でおこなっているの)
- ・自己負担等をしていないのであれば、無理に条件をゆるくする必要はないと考える。
全国フォーラムの打ち合わせに対する旅費の補助
- ・地方から、打ち合わせに上京する交通費を、ほぼ全額会が負担している(辞退する人も有り)。また、現地へ出向いての打ち合わせは、他の理由(講演に行く等)に便乗しているので支払いはしていない。
- ・これは、会運営上の必要経費であり、個人負担を強いるものではないと考えるので、これまで通り支払いたい。便乗の事柄がある場合は、好意に甘えて支払わないですむようにしていきたい。

各プロジェクト委員に対する旅費の補助

- ・たとえば、プログラム編集委員として資料集の編集参加者には、交通費を支給したほうがよいか。（場合によっては、宿泊代の一部補助も）
- ・今後、ホームページ編集委員会等、プロジェクトが増えることが予想される。しかも人数が多いので、どうしたらよいか。これも会運営上の必要経費であり、個人負担を強いるものではないと考えるが、事務局としては厳しい。
資料集等の頒布価格等
- ・現在、会員は無料。会員の2冊目以降は、1部1000円の有償。
非会員は、1冊2000円としている。
- ・今後もこの金額を堅持したい。CD化しても同額としたい。

2 高知フォーラムの概要

竜馬のふるさと・融合フォーラム2005 in 高知開催要項（案）

～ 学社融合維新の夜明けぜよ～

「学校と地域を結ぶコーディネータ力」とは

1. 繋がる・そして融合する～学び、協働する喜びを感じる学校とコミュニティをコーディネートする

学校と地域の融合教育研究会では、「学校と地域が連携・融合して行う教育・学習の理論と実践について研究し、学校や社会で行われる教育・学習の充実を踏まえた生涯学習の進展と、学校を活かしたコミュニティの発展に資することを目的」（会則第3条）に1997年以来活動してまいりました。

2004年の盛岡フォーラムでは、「学社融合」の考え方・手法を使い、市民が自ら考え行動する実践を検証し、今市民が学校及び学校機能と協働して何を創りあげていくべきかということ、市民の活発な活動の事例を通して学びあいました。

土佐は、坂本竜馬を始めとし、明治維新の原動力となったとなった様々な人物を生み出してきました。特に竜馬のコーディネータ力は現在でも高く評価されています。融合フォーラム2005 in 高知では、「繋がる・そして融合する」ということをテーマに、学社融合に求められている「コーディネータ力」とは何か、ということ全国の事例から学ぶ場といたします。

2. 開催日：8月27日（土）12：00受付～ 28日（日）15：00
3. 場所：海辺の果樹園（高知県香美郡夜須町）
4. 主催：学校と地域の融合教育研究会 融合フォーラム2005 in 高知開催実行委員会
5. 共催：高知県教育委員会 夜須町教育委員会（高知市教育委員会）
6. 後援：各地教委
7. 日程

第1日目 8月27日（土）

- 12：30 受付
- 13：00 開会
開会行事
 - ・会長挨拶
 - ・実行委員会長挨拶
 - ・来賓紹介
 - ・日程、会場案内

- 13:15 基調提言～大会の主旨と課題提起
「コーディネート力」についての基調提案
- 13:30 パネルディスカッション 「はじめての学社融合」
それぞれの立場で学社融合のコーディネートをする実例や連携と融合の違い、学社融合のメリットなどを楽しくお話しいただきたい。聞く方が楽しそう、やってみたくと思えるような内容に仕上げしてほしい。
- 15:00 分科会 PR タイム・移動
- 15:30 分科会 発表は2人程度 参加者との意見交流を大切に
はじめての学社融合
パネルディスカッションのテーマをもっと深めたい方のために
・高知市立旭東小学校
学社融合のコーディネーターを考える
・「土佐の教育改革」で設置された、地域教育指導主事たちの果たした役割と課題を中心に学社融合のコーディネート力とは何かを学ぶ
・野老山大人の学校
防災教育と防災活動の融合を考える
・民間手法の活用による防災教育 大津小学校の事例から
・秋津小学校防災キャンプ
・厚木市森の里の防災キャンプ
学校の自立と地域との協働
・高知商業高校のプレゼンと岡崎先生よりコーディネートの体験談
・足立区五反野小の教育改革
学校図書館活動と読書ボランティア活動の融合を考える
・窪川町の取り組み
・土佐町「読み聞かせボランティア養成講座」(土佐町)
・学校図書館の地域開放の事例
学校と地域を結ぶ PTA 活動、おやじ会活動
・東又小と農業青年団トピアとの実践報告
・愛媛県松山市 P T A
・香川県高松市
- 17:30 休憩 チェックイン
- 18:00 屋台(大会議室で)
- 18:30 懇親交流会
*競り市
- 20:30 自由交流

第2日目 8月28日(日)

- 9:00 分科会報告
- 9:30 パネルディスカッション 「学校と地域を結ぶコーディネート力とは」
パネラーに橋本知事も予定しています。(本人の了承済み)
それぞれの立場で、コーディネートということ語ってもらう。
現代社会が抱えている課題のほとんどは学社融合によって解決すると言っても過言ではない。狭義の教育という枠を超えて学社融合の考え方を広めていくことができれば、と考える。その意味で橋本知事には、首長として「住民力を活かすコーディネート」という切り口で語ってほしい。
- フリーディスカッション「学校と地域を結ぶコーディネート」
*会場の参加者全員が自由に討論します。
- 11:45 閉会行事
*融合研あいさつ
*次回フォーラム開催地紹介
*実行委員会による閉会宣言
- 12:00 閉会
- 13:00 地域子ども教室の活動報告

3 北関東支部結成フォーラム

10月23日に、栃木県宇都宮市にある「作新学院高等学校」を会場として、北関東支部設立記念フォーラムが開催されました。

支部長に戸叶俊文さん（群馬県館林市教育委員会）、事務局長に越田幸洋さん（鹿沼市「学社融合研究所」代表）を選出したあと、中身の濃い研修が行われました。とくに、高校生のボランティア参加が多く、また教育関係者や地域の活動家も多く、当初予定の人数を大幅に上回る参加で盛況の内に終了しました。以下は、北光クラブのHP <http://www10.ocn.ne.jp/~hokko/>に見事に掲載されているページからの転載です。

2004年10月23日（土）、午後2時から、栃木県宇都宮市の作新学院高等学校ボランティアセンターにおいて、63名の皆様の参加を得て、第1回北関東支部研修会2004「地域と学校の融合を考える北関東フォーラム」（主催：学校と地域の融合教育研究会 略称『融合研究』 北関東支部）が開かれました。

フォーラムは関口浩副支部長（栃木）の司会進行で進められ、初めに戸叶俊文支部長（群馬）から「北関東フォーラムを茨城、群馬、栃木における学習融合の推進の原動力としていきたい。今回、高校生を交えた研修会を催せたことは意義深いものがあります」と挨拶があり、続いて、融合研宮崎稔会長（千葉）から「融合の発祥の地栃木で行われる今回のフォーラムに心躍らせて参加しました」と祝辞がありました。その後、作新学院高等学校2年生小野真弓さんから、「ようこそ作新学院高等学校ボランティアセンターにおいでくださいました」と歓迎の挨拶があり、研修会へと移りました。

研修会の冒頭では、越田幸洋北関東支部事務局長（栃木）が、融合研プログラム研究開発委員長という立場で「学社融合の活動は、まずは学校施設を活用して自分が楽しむことを基本とし、そこから生み出される教育力を授業にも反映し、結果としてスクールコミュニティの形成を図るものです。北関東フォーラムではこのような姿を追い求め、地域と学校の望ましい関係を形成する場としていきたいと思います」と基調提言を行いました。

研修会第1部は、森照代会員（栃木・作新学院ボランティアセンター）をコーディネーターとした「トーク&トーク」でした。渡邊真知子会員（栃木・北光クラブ）、茂呂有司君（作新学院高等学校）から北光クラブや作新学院ボランティアセンターの活動が紹介され、次に北光クラブと作新学院ボランティアセンターの協働による高校生が企画・運営する子どもための子ども講座の実践について、たくさんの高校生が登壇し、自らの実践意を自らの声で語りました。心臓の高鳴りまでが聞こえてくる発表でしたが、堂々と大きな声で自分の実践を語る高校生の姿に、発表された実践の確かさを感じました。その高校生の発表に刺激されたのか、「発表にあったミサンガづくりを早速自分の地元で実践したい」との声がありました。また、埼玉県嵐山町からは、「地元高校生と作新学院ボランティアセンターの高校生との交流を来年度実施したい」との申し込みもあり、北関東フォーラムは早くも成果を見せだしました。

1時間後に休憩に入り、茂呂君手製のクッキーを味わいました。高校生と参加者成人の会話も弾んでいました。ここでも高校生達が休む間もなく、参加者の接待に走り回っていました。

研修会第2部は山本和子さん（栃木鹿沼・グローバルグループ&鹿沼国際理解教育支援ネットワーク）の実践報告から始まりました。圧巻でした。市民が主体となって学校教育にかかわることで地域全体の教育・学習がいかに活性化するかを証明してくれました。続いて登壇した島田えり子さん（群馬館林・どようひろばスタッフ）からは、「結局は使い捨てなんです」と、学校とボラン

ティアとの関係の厳しさを指摘する発言がありました。学校と地域住民の関係の現状を言い表した言葉であると思います。融合の研究や普及のために活動している我々としては、島田さんにいつか「学校と地域が協働したらこんなに楽しいことができるのですね」という言葉を発してもらえるように、さらに研鑽を積んでいかなければと思いました。島田さんの発表は子育てを通じたコミュニティづくりとして、具体化のためのユニークなノウハウを教えてくださいました。素晴らしいものでした。

最後に越田から公民館講座と授業の融合について提言させていただきました。発表では、公民館講座と授業の融合の実践を例にしながら、「融合は発想の転換です。発想を変えなくては融合はできないのです。旧来の発想に基づいていたのでは、融合することは不可能です。これまでの教育・学習の呪縛から、自らを解きほぐしてこそ、融合に足を踏み入れられるのです。」と融合するための発想の転換の必要性を提言させていただきました。

高校生も交え、参加者全員が研修・交流を深め、新たな成果も生み出した北関東支部研修2004は、午後5時幕を閉じました。会場を後にする参加者の皆様の笑顔に、これを契機に、茨城、群馬、栃木において、学社融合がさらにすすむのではないかと手応えを感じたのでした。

(報告者：融合研北関東支部事務局長 越田幸洋)

懇親会の開始直前に中越地震があり、列車が一時ストップするというハプニングもありましたが、予定の参加者が集まり、和気藹々のしかも品の良い(宮崎会長談)懇親会でした。3番目の支部で会員も少ないのですが、高校生の参加が期待できる上に、理論と実践に優れている会員を擁しているのです。これからの活動が楽しみです。

編集後記のようなもの

遅くなりましたが、会報28号の発行ができました。当初は、12月の発行予定でしたが、役員会で討議する内容が多く、また結論が出ないまま継続審議になったものがありましたので、会員の皆さんに報告することができなかったのです。お詫びします。

さて、17年度からホームページが新しくなります。また、大きな事業である「地域子ども教室も新たに始まります。各会員の実践に弾みをつけることでできるようにと、様々な配慮がされていますので、必ずや融合研の新たな発展に寄与するものと思います。高知フォーラムでは、そのための特別プログラム(情報交換)も予定されました。今年が、融合研及び皆様にとって、また飛躍する年になることを願っています。(宮)